巻　頭　言

人は善きにつけ悪しきにつけ「変化」ということにこだわりたいもののようである。“変わりたい”“変えなければならない”と努力し、“ああ、変われたら！”と願い、あるいは悲しみをこめて“すっかり変わってしまった……”と嘆く。夢と、期待と、時には失望と涙を伴って、それらの表現は社会や環境に対して、そして人間について、ある感慨をこめて使われる。また、変わるためにはそれまでの何かが死ななければならない、あるいは何かを失う体験をすることが多い。そしてそれには痛みを伴い、時としてその人を危機的な状況に陥らせることもある。それを乗り越えるためには何らかの心の儀式が必要であり、それを行うのに適する枠組みと援助があったほうがよい。

精神医学者のC.G.ユングは精神分析や心理療法の過程を“錬金術”のそれになぞらえて研究している。悲劇の技術といわれる錬金術は紀元前より18世紀頃まで、多くの人々の莫大な犠牲とエネルギーを投入されたものである。卑金属（ただの石）を貴金属（黄金）に変えようとするこの試みは結局失敗に終り、近代以降においては非科学的で無知蒙昧な神秘主義の代名詞となっていると言っても過言ではない。しかし、ユングは１つには合理主義に走りすぎる近代科学への疑問からこれを取り上げ、さらに、錬金術は物質としての金を求めたのではなく、人の変容の結果としての魂の救済という意味の『金』を探求する独自の思考方法であったと論じている。錬金術と心理療法における変容の過程の対比は、その変化の段階、使われる用具や場所の持つ意味などにおいて興味深い。

人間関係科の学習方法であるラボラトリートレーニングのラボラトリーとは実験室の意である。この実験室（laboratorium）こそ錬金術において最も大切にされたものだといわれている。その語源は、労働（labor)と祈りの場（oratorium)であり、錬金術の場は単に実験と労働の場であるのではなく、そこに『いのり』という精神性を加える場でもなければならなかったのである。祈りを込めてエネルギーを投入し、準備される『場』に入るとき、そこで人はこれまで気づかなかった自己の可能性に出会うことができる。

古代の錬金術は現実の金を作り出すことは出来なかった。しかし、人間の中にある『金』を生成することは教育の場でも、治療の場でもこれからも追及されていってよい。教師や治療者は容れ物としての場を整え、変化を信じ、見守りつつ待つ存在であろうか。人間関係のトレーニングもそうした意味での「変化」の可能性に出会う場として提供されているのである。

神通力を持った錬金術師は変化するその人自身の中に住んでいるといえるのではないだろうか。

（木　村　晴　子）